



『襟裳岬と蝶のさなぎとリテラシーの関係』

皆さん、ついに厳寒の季節が到来してまいりました。階段を下りるとき無意識のうちに体が丸まってポケットハンドになっていないか気をつけてみてください。

さてこんな寒い季節にはフォークソングがマイブームです。特に吉田拓郎&岡本おさみの『襟裳岬』が心を温めてくれます。『北の町ではもう悲しみを暖炉で燃やし始めてるらしい』という名文で始まるこの歌は70年代の心の豊かさにあふれている気がします。確か森進一がこの歌でレコード大賞を受賞したのではなかったでしょうか？

『心のリテラシー』という言葉がある方から教わりました。

今、巷には『金融リテラシー』とか『情報リテラシー』という言葉が氾濫していて、それらは金融に関する特別な知識とか、コンピューターを用いた情報の整理や発信の能力とかの意味らしいのですが、それらの知識とか能力をバリバリと活用してビジネスを行っている日本人はたくさんいると思いますが、『心のリテラシー』はさてどれ程の数の日本人が活用しているのだろうか？という疑問があります。

『心のリテラシー』とは、
たとえば、相手の心を気遣うことができる力。
たとえば、相手の話を親身になって聴く力。
たとえば、言いたいことを適切に伝える力。
たとえば、自分のマイナス感情を受け入れる力。
たとえば、自分と相手の間に共感を生み出す力。



若者の間では、相手を茶化すばかりの軽いノリの会話のやり取りが延々と続き、巧妙に相手を茶化したほうが相手からエネルギーを奪い、スカッとし、茶化されたほうがお決まりのようにエネルギーを奪われ、いやな気分になる。いい加減そんな相手からは距離を置けばいいのに、孤立し孤独になるよりはましと、ズルズルとそんな仲間関係を続けてしまう。

グループの中に一人でも『心のリテラシー』を活用できる者がいれば、『お前自分で気づいていないかもしれないけど、いい加減、人からエネルギー奪って喜ぶのやめろよ!!』と忠告できるかもしれない。

学校のイジメ問題がいっこうに改善されていないのは、数学や理科の授業と同等に『心のリテラシー』の授業を生徒たちに受けさせていないことに起因しているのかもしれない。

ウツや引きこもりになる子供たちは、来るべき『心のリテラシー』全盛の時代である『春』を待つ、美しい蝶のさなぎと言えるかも知れません。

またこのことは学校だけの問題ではないと思います。職場でもそうだと思います。我々はもっともっと社会人として、日本人として、人間として学ぶことがたくさんあると思います。1度学べばなるほどと思うことも、知らないでいると無意識のうちに周りややりあって人間関係の戦場と化してしまっていることも少なくないのではないのでしょうか？子供に『勉強しろ!!』と口うるさく言っている場合ではないのではないのでしょうか？

『寒い友達が訪ねて来たよ～遠慮は要らないから温まって行きなよ～』
そんな職場にしたいものです。

感謝！ 羽原 篤史